

ボルネオ島における木材伐採業者と政治家の癒着

—インドネシア・中部カリマンタン州とマレーシア・サラワク州の事例—

森下 明子 氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

近年ボルネオ島では、大規模な木材伐採やプランテーション開発により、森林減少が急速に進んでいる。またインドネシアでは 1990 年代以降、地元の木材伐採業者による違法伐採の問題が深刻化した。こうした合法・違法な木材伐採、プランテーション開発等により、地元住民の生活空間は侵食され、生態系においても生物多様性の喪失が懸念されるようになった。

しかし今後も森林開発（特にプランテーション開発）はますます盛んになるといわれ、その背景には木材伐採業者と政治家の癒着が深く関係している。

本発表では、森林開発の利権に絡む伐採業者と政治家の癒着について、インドネシア・中部カリマンタン州とマレーシア・サラワク州の事例を報告する。政治制度が異なるカリマンタンとサラワクにおいて、政財の癒着の構造がどのような点で共通し、どのような点で異なるのか。また中央政財界と地方政財界の関係はどのような点かといった点に注目する。具体的には、中部カリマンタンとサラワクにおいてそれぞれ最も有力な木材実業家である（であった）アブドゥル・ラシッド（中部カリマンタン）とティオン・ヒュー・キン（サラワク）に注目し、彼らがこれまでどのようにして中央・地方政界の有力者たちと関係を築いてきたかを見ていく。